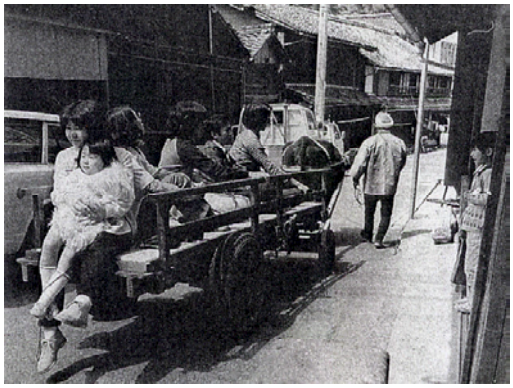
足助屋敷誕生物語　（1990 年 4 月 27 日発行『三州足助屋敷の 10 年』より、p8－11）

## 足助屋敷前夜

町面積の 86%を山林が占め、夏期農業、冬期林業という三河山間地の伝統的な生活が営まれた足助町。その暮らしは、昭和 30 年代の高度経済成長が始まると、大きく変わった。



牛にひかれて、塩の道。話題を集めたイベント「もうもう牛車」

トヨタ自動車関連の労働市場として、働き手が都市に吸収される。現金所得を得、あるいは山の土地と引きかえに、機能的で便利な都市生活が導入される。転出者は相次ぎ、昭和 30 年に１万７千人だった人口が、町は過疎地域対策緊急措置法に基づき、過疎地域に指定された。

山仕事や農業が会社勤めの片手間に追いやられると、山の管理は手薄になり、農業規模は縮小した。また昼間人口の減少は、地元商店街にも大きな影響を及ぼした。人口流出にともなう危機感が深まる。

トヨタの城下町に甘んじることなく、「足助町に住む」ことにプライドを持つためにはどうすればいいのか。「都市型発想の開発ではだめなんだ。村人の心まで過疎にしてしまう。」こんな反省が生まれてきたのは、昭和４０年代後半。都市近郊山村として、独自のライフスタイル築き上げる必要性が認識されてきた。

噴水など、都市公園的発想で整備してきた香嵐渓を、木造草葺という、足助固有の風景の創出へと方向転換する。さらに信州への街道—塩の道の宿場町として栄えた町並みの中から生まれてきたのが、かつての山里の暮らしを再現する「三州足助屋敷」建設構想である。

## 物は使われてこそ、生きる

三州足助屋敷の構想が、ぼんやりした輪郭で浮かび上がってきたのは昭和４８年頃。発案者は、後に足助屋敷の初代館長を務めることになる小沢庄一。当時、町産業観光課の係長だった。足助街道に牛を走らせたイベント「もうもう牛車」や、町並み保存運動の仕掛け人でもある。彼は、「価値観が多様化している時代、もう一度じっくり地域文化を見直す必要があると思った。観光客ではなく、地元自身のために」と、当時を振り返る。

都市からの情報を一方的に受け入れるのではない。足助町が主体となって、情報を発信するための素材は何か。それは、足助町が培ってきた歴史や文化に他ならないのではないか—。しかし、伝来の土蔵は惜し気もなく壊され、おびただしい数の民具などが捨てられ

ている。「このまま放っておくと、子や孫に父祖の暮らしや風習を伝えるすべもなくなってしまう。」

当時は、郷土館や資料館建設がブームの時期だった。足助町も、散逸している民具の収集と保存を目的に、町議会や役場職員らが既設の資料館の研修を始めた。

見学する資料館の展示物は、どれもが使い込まれた本物だった。人の手のぬくもりや、かつての生活の歴史を感じさせるものではあった。使い捨ての時代だからこそ、考えてみるべき貴重な資料のはずだった。しかしケースに飾られた民具からは、暮らしのロマンを感じることができなかった。「物は使われてこそ生きる。そして、物を作る過程を知ることが大切なのではないか」。

絞りや木地ろくろの実演をしているところもあった。立派な建物の中でポツリポツリと実演する人たちは、他の展示物と同じように、「見せられている」にすぎなかった。「こんなことは許されない。」実際に働いている職人の姿をきちんと見せなければ」。少しずつ少しずつ、足助屋敷の構想がまとまり始めていた。

## 地域振興を押し進める施設へ

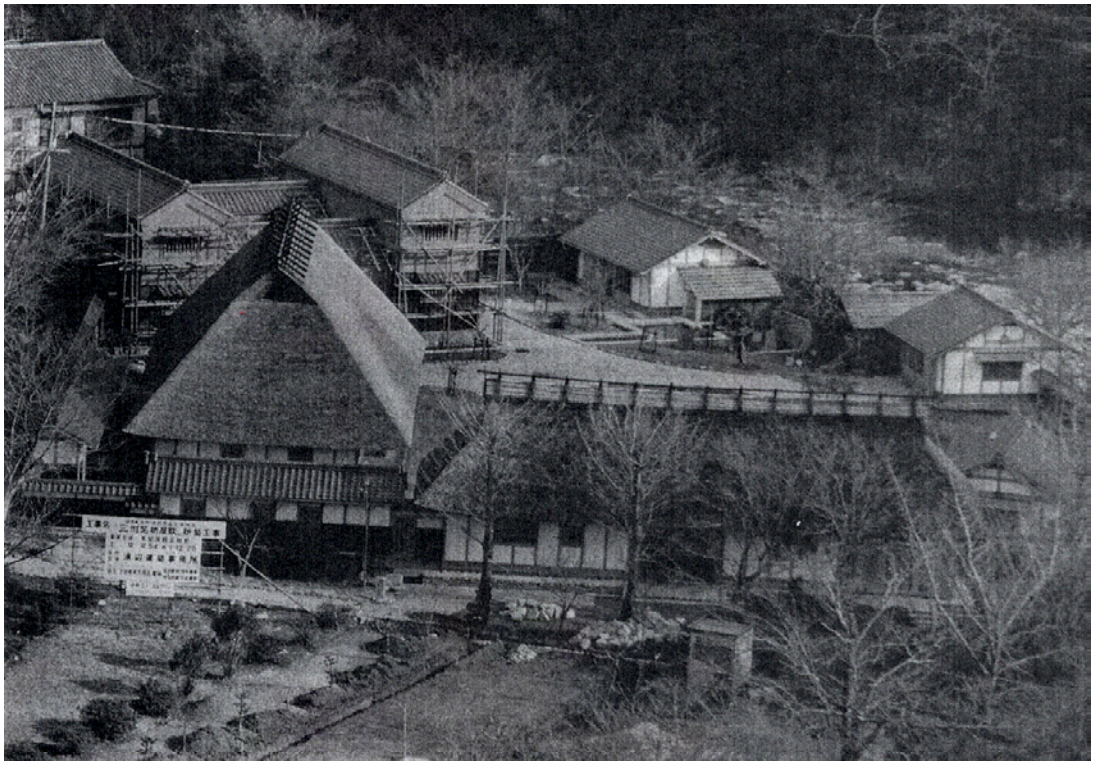
山里の暮らしはかつて、手づくりがあたりまえだった。炭を焼き、ろくろを回し、機を織り、人々はこまやかな生活者だった。そこには、物の価値では計れない豊かさがあった。それを復活し、現代社会を問いかける場とする。生きた民俗資料館、足助屋敷の基本構想がまとまり、具体的な事業として動き出した。

昭和５３年３月、町議会で「三州足助屋敷」設立に関する質疑が行なわれる。しかし、今までの資料館とは全く違う発想の足助屋敷を、明確にイメージできる人は少なかった。「わけのわからん施設に人が来るか」。「見て回った資料館は２、３人の職員しか置いてな

くても採算がとれていない。本当に経営できるか。」「そんな古くさい発想は、時代に逆行しているのではないか」。議員から矢つぎ早に質問が出された。

さまざまな議論の末、ようやく、三州足助屋敷は「保存」のみの資料館でなく、地域振興を推し進める「経済」をプラスした施設として、昭和５４年度、農林水産省の山村振興法に基づく第２期山村地域特別対策事業の補助を得て、スタートすることになった。

そして、三州足助屋敷は、「人間性創造のための文化型観光」と位置づけられる。「観光とは、訪れる人々との交流の中で、地域色豊かな文化遺産を公開し、保存・継承しつつ、地場産業に育て、所得を得ると同時に、地元の民度をひきたて、愛郷心を高めるものだ」。足助屋敷の理念である。



建設中の足助屋敷全景

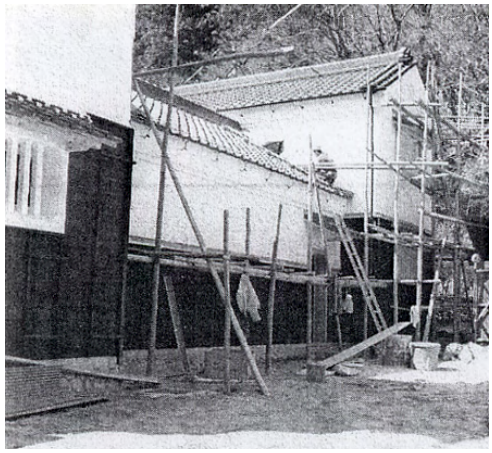
## 老人の福祉とは「生き甲斐工房」

まず、人材である。足助町にあった１０種以上のぼる手づくりの技術をもつ職人たちは、時代の変化で働く場を失い、みな高齢者となり、ある者は工場へ働きに出、ある者は引退していた。その人たちにもう一度、手仕事を始めてもらわねばならない。

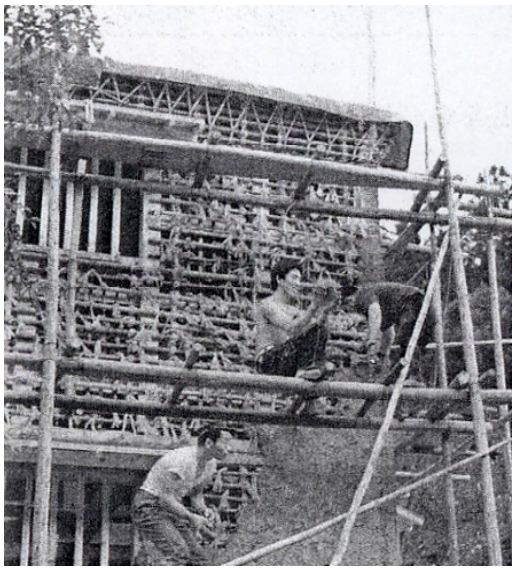
「今さらそんなことやって、何になるんだい。孫に菓子を買うくらいの金はあるよ」。「あの仕事は楽じゃない。おれは年も多いから、ほかに聞いてくれ」。「見せ物にする気かい」。始めは渋っていた老人たちも、熱心な説得に動かされ、腰を上げた。２０年３０年と離れていた手仕事の勘は、１週間もすれば取り戻すことができた。後に「生き甲斐工房」と名

付けられるように、足助屋敷は思いがけず「真の老人福祉とは何か」を考える端緒になった。

昭和４８年におぼろげな構想が出て以来、足助屋敷建設に至るまでには、さまざまな調査や実験的な試みが行なわれている。５０年に香嵐渓ビジターセンターの前に作られた、「むかし工房」もその一つである。そこで、竹や藤細工・木地ろくろ・紙漉きなど７人の老人が、初めて、観光客の前で手作りの技術を実演、製品を販売した。画一大量生産の時代にあって、手作り品の販売では、原材料費ばかりか労務費も出ないということが改めてわかった。これを、何とか採算ベースにのせなければならないのだ。



## 職人が腕を競った屋敷建設



足助屋敷建設にあたって、当初からあったキーワードは、山の暮らしに欠かせなかった「イロリ」である。かつては、そのまわりで食事をし、手仕事をし、子供たちは老人から昔話を聞き、暮らしの知恵を学んだ。囲炉裏で燃える薪の炎、暖かさ、煙のにおい。そこには、都会の人間が、そして今は山の子供たちも知らない、山里のロマンがある。「イロリ」の復活を原点に、足助屋敷の建設は始まった。

設計は、大阪の浦辺鎮太郎氏に依頼した。浦辺氏は、昔の紡績工場を新しい観光の場「アイビースクエア」として再生させるなど、倉敷の歴史の「保存的再生」に取りくんできた建築家である。昭和５３年、足助町で開かれた、第１回全国町並みゼミが出会いだった。

「雄大な自然の営みの中では、建築は小さなものだ。建築はむしろ、自然の中にそっと建っていなければならない」浦辺氏は言った。そして打ち合わせを重ねるうちに、当初考えられていた鉄筋コンクリートの建物は、木造で中庭をもつ明治期の庄屋屋敷のプランに変わっていった。

建築の伝統技術の復活と、伝承の場となった建設現場

約３千㎡の敷地の中に、母屋、土蔵、長屋門、作業小屋を配し、水車小屋で米をつき、ニワトリや牛を飼い、囲炉裏端で食事をする。古い家屋の移築という方法はとらず、あえて新築することにした。総工費は１億２千万円。地元の材を使い、地元の職人の手で作る。地域振興の一環と位置づけられた足助屋敷の理念は、建設時においても生かされている。

公共事業の経験も、入札資格もない地元の大工５人が、建設企業体をつくって、建設にあたった。新建材が出回り、なかなか本来の腕をふるう機会のない時代、伝統工法による久々の本格的な仕事である。職人たちは、損得抜きで仕事にあたった。予算の都合で、土蔵をコンクリート造りにしようと言っても、職人たちが承知しない。「本物でなければ意

味がない」と。それは、さながら、技術の披露会といった様子であった。
　土蔵造りやカヤ葺き屋根が、「初めての経験」という者もいる。「土蔵には、壁土がこんなに要るのか」と驚いた左官がいる。母屋の屋根を葺く職人は、もう足助町にもいなかった。下山から、小原から、旭町から、さまざまな職人がやってきて、それを若い衆が手伝った。屋敷の建設現場は、途絶えかけていた建築の伝統技術をよみがえらせ、弟子たちに伝える貴重な学習の場ともなった。
　工事に携わった職人の数は、のべ１００人。ほとんどの者が赤字だったが、みんな大満足だった。「また、こういう仕事がしてみたい」、若い大工がこう言った。

◇　◇　◇　◇　◇

　足助町のもつ文化・技術・特産、そして人材を総動員して、昭和５５年４月２７日、三州足助屋敷は開館した。試行錯誤を繰り返しながらの建設だった。その過程で多くの人と出会い、学び、新しい発見をした。生きた民俗資料館「三州足助屋敷」は、手づくりの技術を持った老人の働く場であり、観光であり、何より、この町に住む誇りを取り戻すための運動であった。そして、それは、まだ始まったばかりなのだ。